

## ハイデガーにおける「現在」概念の問題

森正樹(慶應義塾大学)

本発表の目的は、ハイデガーが『存在と時間』で提起した本来的で根源的な時間概念をいまいちど現在という時間契機に焦点をあててその独自性を確保しようとするにある。以下では、まず『存在と時間』における時間概念の諸相を確認する。次になぜ現在が問題となるのかを明示する。最後にどのようにその独自性を確保するかを論じる。

まず『存在と時間』における時間概念の諸相を確認する。『存在と時間』はわたしたちの時間概念を一新しようとする試みであった。その主張概略を描くなら次のようになる。まず根源的な時間概念として、本来的時間性があり、そこから日常的・非本来的時間性、そしてその学的な洗練化を受けたものとして通俗的時間概念が順次派生してくる、というものである。便宜上、三つの位相にわけた時間概念の特徴をそれぞれ簡潔に説明するなら、次のようになる。本来的時間性は現存在の先駆的決意性に即してあらわれてくる時間性であり、そこでは死という無の可能性を開示する将来が優位となっている。そして日常的・非本来的時間性は有意義的な時間理解のうちでの「～までに～しよう」といった日常的な振る舞いを可能にする時間性である。最後の通俗的時間概念は有意義的な時間理解を抽象化することで成立する。すなわち時間を均一な仕方でも無限に広がる数直線として表現することを可能にする時間概念である。

本来的時間性が将来に優位におくに対して、非本来的時間性および通俗的時間概念は現在に優位をおくとされる。時間概念は伝統的に現在に優位をおいてきたというこの主張は、周知のとおり、ハイデガー以後の哲学に大きな影響を与えている。

しかし本来的時間性に関して、次のような看過できない記述がある。

現在化(Gegenwärtigen)という意味の現在においてのみ、決意性はそれがあるとおり存在できる。(SZ 326)

他ならぬハイデガー自身が現在という表現を強調しつつ、本来的時間性があらわれる先駆的決意性の現存在は、現在・現在化のうちでこそ本来のすがたで存在すると主張している。現在化はいわゆる非本来的な現在であって、瞬間(Augenblick)が本来的な現在であることを考慮すれば次のことが問題となろう。すなわち本来的時間性も結局は現在に優位をおく非本来的時間概念ということになるのであろうか。それぞれの現在化はいかなる点で異なるのだろうか。

上記の問題に対する本発表の基本方針は次のものである。本来的時間性・非本来的時間性・通俗的時間概念すべてが現在化を遂行するということを前提としたうえで、それぞれの現在化には差異があることを認める、というものである。本来的時間性の現在化の独自性を確保するために本発表は二つの論点を中心に据える。まずそのうちで存在者と関わり合う現在化には、いかなる背景・観点から当の存在者を現在化するのかを開示する契機が含まれること、つぎに瞬間をその契機として扱い、現在化と不可分なものとして認めること、である。この方針のもとで本発表は以下のように議論を進める。

最初の論点について、キシールはハイデガーが現在化という概念を用いる以前には、付帯現前化(Appräsentieren)という概念を用いていたことを指摘する。キシールによれば、ハイデガーは、事物を現在的にする際に、共に現前化させられているものを、この概念で名指しており、それは世界の現前性だと指摘する。ここから付帯現前化においては、事物は単独で現れてくるというだけでなく、その背景や観点と共に現れていると敷衍できよう。一見すると『存在と時間』では、現在化という概念はもっぱら存在者を現在化することのみに用いられている。しかし本発表は少数ながら使われる *Gegegen-wart* というハイフンで区切られた現在がそうした存在者の背景や観点を開示する役割を果たしていることを論じる。

二番目の論点について、本来的な現在である瞬間は以前よりその存在論的な身分が問題視されてはきたが、主體的かつ積極的に展開されてきたとは言いがたかった。そこで本発表はその概念のみを網羅的に論じた現状ではほとんど唯一の先行研究であるカタリナを参照する。瞬間は存在のその都度性(*Jeweiligkeit*)を明らかにするとカタリナは論じる。本発表はこの解釈を次のように援用したい。すなわち瞬間は存在者の背景や観点を開示するが、そのとき開示されるのは世界のその都度性だということである。

最後に本来的時間性・非本来的時間性・通俗的時間概念のそれぞれにおける、現在化のうちで現れる存在者の特徴およびその存在者が現れる際の背景や観点の特徴を比較することで、本来的時間性の独自性を浮かび上がらせる。

以上を踏まえた上で描きたい本来的時間性の独自性は次のものとなる。本来的時間性もやはり他の時間概念と同様に現在化を遂行する。しかし本来的時間性はその現在化において、存在者をどのような観点から開示するかといえば、その都度性に依拠した世界(より正確には現に存在すること)である。

### 参考文献

- Heidegger, Martin.(2006), *Sein und Zeit*, 19Aufl., Tübingen: Max Niemeyer.
- Katharina, von Falkenhayn. (2003), *Augenblick und Kairos*, Berlin: Duncker & Humblot.
- Kisiel, Theodore.(1983), „Der Zeitbegriff beim früheren Heidegger (um 1925),” *Zeit und Zeitlichkeit bei Husserl und Heidegger*, Rudolf Bernet (Hrsg), München: Karl Alber.